

# レポート作成のために SQL サーバを設定する

---

ユーザが TrafficDirector アプリケーションを Windows NT プラットフォームにインストールし、Microsoft SQL データベース (埋め込みデータベースの代わりに) を選択している場合には、Trend Reporter を使用して履歴トレンド・レポートを作成する前に、エージェントからデータを収集するための固定レポジトリを設定する必要があります。

この章では、SQL サーバの定義およびロギング目的のためにエージェントを設定する方法について説明します。サーバの定義とエージェントの設定が完了すれば、Trend Reporter を使用して複数の管理ステーションからロギングされた情報に基づいてレポートを作成することができます。

以下の節で、さらに詳細に説明しています。

- SQL サーバと TrafficDirector アプリケーションの動作上の関連性
- 分散型データベース・アーキテクチャの理解
- Microsoft SQL Server の設定
- クライアントのインストール
- SQL データベースのセットアップ
- SQL サーバ定義の保持
- ロギングの概要
- ロギングの有効化と無効化
- TrafficDirector アプリケーションの終了時にデーモンをシャットダウンする
- レポート用データのロギングとエージング

## SQL サーバと TrafficDirector アプリケーションの動作上の関連性

Trend Reporter アプリケーションは、SQL データベースの情報に基づいてレポートを生成します。Configure SQL Servers アプリケーションを利用すると、ユーザは各データベースを SQL サーバとして設定することにより、SQL データベースへのアクセスを定義することができます。TrafficDirector ソフトウェアをコピーする度に 1 つの SQL サーバにしか書き込みが実行されませんが、ユーザがこのアプリケーションを利用すれば、TrafficDirector アプリケーションが複数の SQL サーバから読み込むように設定することができます。

TrafficDirector アプリケーションは、分散型データベース・アーキテクチャをサポートします。このような設計によって、複数の管理ステーションを使用してネットワークを監視し、各管理ステーションが 1 つの SQL サーバにロギングするように設定できます。他の管理ステーションがロギングしている SQL サーバにアクセスするには、Configure SQL Servers を使用して、TrafficDirector アプリケーションで読み込みたい各 SQL サーバを定義し、それぞれのサーバをエージェントと関連付けます。

たとえば、TrafficDirector アプリケーションを使用してレポートを生成し、各管理ステーションによって収集されたデータを含めたい場合には、TrafficDirector システム上で以下のタスクを実行する必要があります。

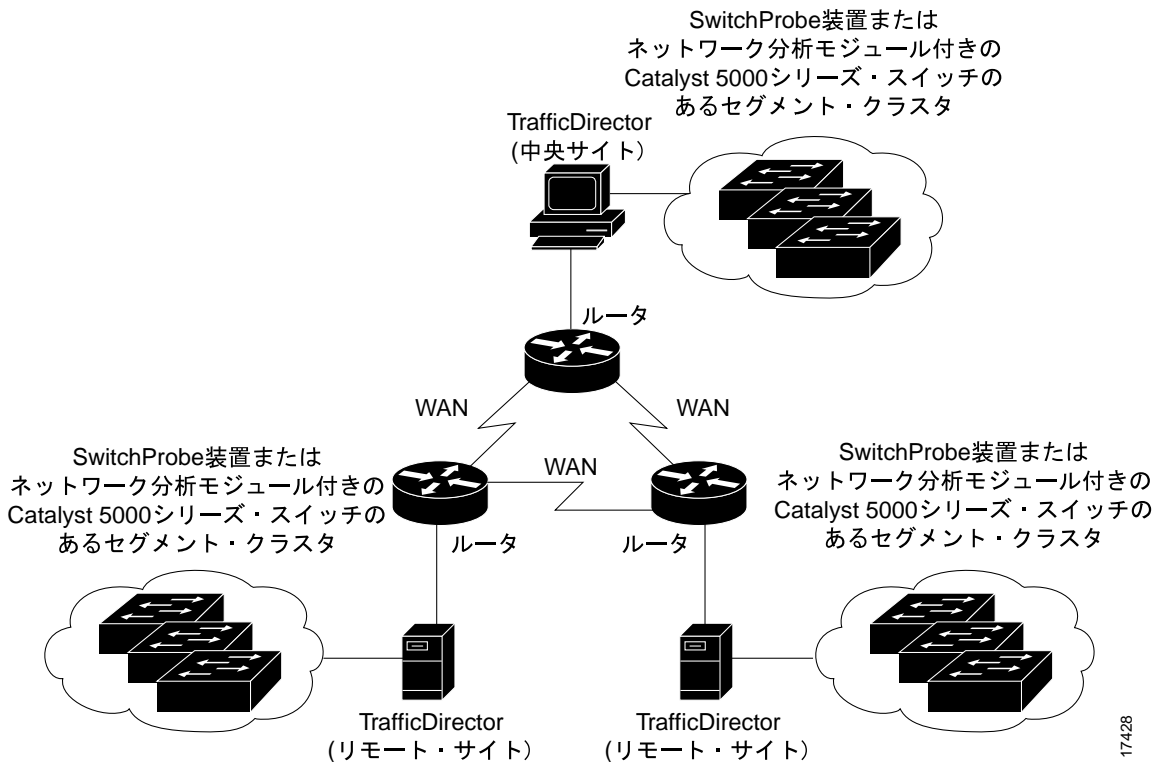
- TrafficDirector ソフトウェアの各コピーがロギングする SQL データベースを、SQL サーバとして定義します。このように定義すると、TrafficDirector アプリケーションが各データベースにアクセスするために必要な情報が得られます。この詳細については、「TrafficDirector アプリケーションへ SQL サーバを定義する」を参照してください。
- TrafficDirector ソフトウェアの各コピーがロギングしているエージェントを追加することによって、各 SQL サーバをエージェントに関連付けます。この詳細については、「SQL サーバをエージェントへ関連付ける」を参照してください。

## 分散型データベース・アーキテクチャの理解

ルータ間および WAN リンクにおけるポーリングは、低速になり、帯域幅が浪費される恐れがあります。TrafficDirector アプリケーションには、分散型データベース・アーキテクチャが採用されているので、TrafficDirector アプリケーションの複数の繰り返し動作をセットアップしてエージェントをローカルにポーリングし、それぞれに対応した SQL データベースにデータをロギングすることにより、不要な WAN トラフィックを排除することができます。中央の TrafficDirector ロケーションを使用して、レポート時に情報を検索することができます。この方法によって、すべてのエージェントがローカル・セグメント・クラスタにポーリングする動作が制限され、各リモート管理ステーションによって収集されたデータに基づいてユーザがレポートを生成するときに、WAN リンクを通して情報を検索します。

図30-1に、分散型データベース設計を示します。ここでは、1つのTrafficDirector管理ステーション、そして2つのTrafficDirector管理ステーションがローカル・セグメント・クラスタをポーリングしています。

図 30-1 分散型データベース・アーキテクチャ



(注)すべての管理ステーションは、ローカル・セグメント・クラスターにあるエージェントをポーリングしており、それぞれ該当する各SQLデータベースにデータを書き込んでいます。各ルータ間を経由したWANリンクによるポーリングはまったく実行されません。ユーザの組織構造に応じて、各ローカル・サイトで自分のレポートを生成したり、各リモート・サイトでローカルに収集されたデータに基づいて中央サイトでレポートを生成することもできます。

## Microsoft SQL Server の設定

TrafficDirector アプリケーションには、SQL データベースを使用する Trend Reporter と呼ばれるユーティリティが用意されています。このユーティリティを使用するには、以下の設定項目を含むNTサーバ部分を設定することが必要です。

- SQL デバイスの作成
- 該当するデータベースの追加
- 正しいアクセス権を持ったユーザの追加

---

(注)Windows NT サーバ上に SQL サーバをインストールする必要があります。TrafficDirector アプリケーションをインストールする前に、SQL サーバと SQL クライアントをインストールすることが必要です。

---

以下の節で、さらに詳細に説明しています。

- サーバおよびクライアント・ネットワーク・オプションの設定
- SQL サーバの登録
- SQL データベースの作成

### サーバおよびクライアント・ネットワーク・オプションの設定

サーバおよびクライアント・ネットワーク・オプションを設定するには、以下の手順に従います。

**ステップ 1** SQL プログラム・グループから [SQL Setup] を選択します。

**ステップ 2** [Change Network Support] ボックスをクリックします。

TCP/IP ソケットだけにチェックが入っていることを確認します。デフォルト設定では、[Named Pipes] にチェックが入っています。

**ステップ 3** SQL プログラム・グループから [SQL Client Configuration Utility] を選択します。

**ステップ 4** [Net Library] タブをクリックします。

- ステップ 5 [Default Network] を [Named Pipes] から [TCP/IP Socket] に変更します。
- ステップ 6 [Advanced] タブをクリックします。
- ステップ 7 サーバ名を入力します。
- ステップ 8 DLL 名を [TCP/IP sockets] に変更します。
- ステップ 9 コネクション文字列の隣に表示されている [Locate] をクリックします。  
3 つの DLL のリストが表示されたポップアップ画面が現れます。
- ステップ 10 [dbmssocn] を選択します。
- ステップ 11 [Done] をクリックします。
- ステップ 12 [Add/Modify] をクリックします。
- ステップ 13 [Done] をクリックして、ウィンドウを終了します。

## SQL サーバの登録

- SQLサーバを登録するには、以下の手順に従います。
- ステップ 1 SQL Server Program グループから SQL Enterprise Manager を起動します。
  - ステップ 2 最上部に表示されているメニュー・バーで [Server] をクリックします。
  - ステップ 3 [Register Server] をクリックします。
  - ステップ 4 [Server] フィールドにサーバ名を入力するか、またはプルダウン・メニューからサーバ名を選択します。  
この名前は、NT サーバの名前とします。
  - ステップ 5 [Use Standard Security] にチェックが入っていることを確認します。  
ログインIDはsaです。パスワードは使用しないでください。
  - ステップ 6 [Register] をクリックします。  
[Enterprise Manager] ウィンドウのサーバ名の横に緑のライトが表示されるはずですが、エラーが発生している場合には、そのサーバは存在しません。

- ステップ 7 SQL Server Program グループから [Service Manager] を選択します。
- MSSQLserver プロセスと SQLExecutive プロセスの両方が起動するはずですが。
- ステップ 8 この両方のプロセスを停止させて再起動し、サーバの登録を再試行してください。

## SQL データベースの作成

SQL データベースを作成するには、以下の手順に従います。

- ステップ 1 [SQL Enterprise Manager] アイコンをクリックします。
- ステップ 2 メニュー・バーで [Manage] をクリックします。
- ステップ 3 [Database Device] を選択します。
- Manage Database Devices ウィンドウが開きます。
- ステップ 4 ウィンドウの左上に表示されているアイコンをクリックして、新しいデータベース・デバイスを作成します。
- ステップ 5 このデバイスに、NETSQL という名前を付けます。
- ステップ 6 約 300MB の容量をこのデバイスに割り当てます。
- この例のデータベース・サイズは、デフォルト・エージングの 1 つの RMON ドメインをもつ 6 つのエージェントに基づいています。実際のサイズは、ポーリングされるドメイン数とエージェント数に応じて異なります。デバイスのサイズはいつでも変更することができます。
- ステップ 7 [Create Now] をクリックします。
- NETSQL が棒グラフで表示されます。
- ステップ 8 このウィンドウを閉じます。
- ステップ 9 メニューバーで [Manage] を選択します。
- ステップ 10 [Databases] を選択します。
- ステップ 11 画面の左上に表示されているアイコンをクリックします。
- この操作によって、ユーザが作成した新しいデータベース・デバイスである NETSQL の一部となる、新しいデータベースを作成することができます。
- ステップ 12 このデータベースに TXTREND\_DB という名前を付けます。

このデータベースのサイズをデータベース・デバイスのサイズより大きくすることはできません。

---

(注)TXTREND\_DB を作成するときに、データベース・デバイスとして NETSQL が選択されていることを確認してください。

---

ステップ 13 [Create Now] を選択します。

ステップ 14 ウィンドウを閉じます。

ステップ 15 Server Manager ウィンドウで [Server Name] をクリックします。

インストールしたすべての項目が、ツリー構造で表示されるはずですが。

ステップ 16 [Database] をクリックし、その後で TXTREND\_DB をクリックします。

ステップ 17 メニュー・バーで [Manage] を選択します。

ステップ 18 [Groups] を選択します。

---

(注)ツリーで TXTREND\_DB が反転表示になっていなければ、メニューで [Groups] はグレー色に薄く表示されます。

---

ステップ 19 NETSQLUSERS という名前のユーザ・グループを作成します。

このグループは、TXTREND\_DB と関連付けられます。

ステップ 20 レポートを行うユーザの名前を追加します。

---

(注)ユーザを追加するときに、TXTREND\_DB が反転表示になっていることを確認してください。反転表示になっていなければ、このユーザはデフォルトのマスタ・データベースに追加されます。

---

ステップ 21 デフォルト設定通りに [Permit] にチェックが入っており、ユーザ名が正しいことを確認してください。

ステップ 22 [Group] の下の [netsqlusers] を選択します。

---

(注) [Public] (デフォルト) は選択しないでください。

---

---

(注) Null パスワードは使用できません。パスワードはユーザ名と関連付ける必要があります。

---

ステップ 23 TXTREND\_DB を反転表示にします。

ステップ 24 最上部に表示されているメニュー・バーから [Manage] を選択します。

ステップ 25 [Databases] を選択します。

ステップ 26 画面の左上に表示されている中央アイコンをクリックして編集します。

ステップ 27 [Options] タブをクリックします。

ステップ 28 [Truncate Log on Checkpoint] をクリックします。

このコマンドは、データベース内のデータ用空間を節約します。

ステップ 29 [Permissions] タブをクリックします。

ステップ 30 Netsqlusers および作成したユーザの両方に All permissions を与えます。

## クライアントのインストール

---

(注) SQL サーバをインストールした同じ Windows NT サーバに、TrafficDirector アプリケーションをインストールする場合には、SQL サーバのインストール時にデフォルトで ISQL クライアントがインストールされるので、ステップ 4 に進んでください。

---

クライアントをインストールするには、以下の手順に従います。

- ステップ 1 TrafficDirector アプリケーションをインストールするドライブに SQL Server CD を挿入します。
- ステップ 2 i386 ディレクトリの SETUP.EXE を実行します。
- ステップ 3 [Setup Options] で [Utilities Only] を選択します。  
インストールが終了すると、[ISQL/w] アイコンが作成されます。
- ステップ 4 [SQL Server Program] グループから [ISQL/w] アイコンをクリックします。
- ステップ 5 SQL サーバの IP アドレスを入力します。
- ステップ 6 サーバ上で作成したばかりのユーザについて、ユーザ名とパスワードを入力します。
- ステップ 7 [Connect] を選択します。  
SQL クエリ・ボックスが開きます。
- ステップ 8 このユーティリティを最小化します。  
このシステムに TrafficDirector アプリケーションをインストールするときには、接続した状態に維持しておくことが必要です。

## SQL データベースのセットアップ

TrafficDirector ソフトウェアがデータを使用して Trend Reporter アプリケーションによる長期のトレンド・レポートを作成できるように、ネットワーク統計情報のレポジトリを確保したい場合には、SQL データベースにロギングするために1つまたはそれ以上のSQL サーバをセットアップする必要があります。

TrafficDirector ソフトウェアには、すべての Windows プラットフォームおよび UNIX プラットフォーム用の埋め込み SQL データベースがバンドルされています。Windows NT サーバ・プラットフォームで実行される TrafficDirector ソフトウェアの利用によって、ユーザは Microsoft Windows SQL サーバを SQL サーバ・データベースとして使用することができます。

以下の節で、さらに詳細に説明しています。

- データベースを展開するためのオプション
- 統計情報の収集用オプション
- TrafficDirector アプリケーションへ SQL サーバを定義する

### データベースを展開するためのオプション

TrafficDirector ソフトウェアを正しくインストールするためにインストール・スクリプトを実行している間に、どちらのタイプの SQL データベース（埋め込み SQL または Microsoft SQL サーバ）を使用するかを選択します。

- データベース・オプションとして埋め込み SQL を選択すると、ロギングされたデータはすべて、TrafficDirector ソフトウェアがインストールされるホストと同じホストに保存されます。
- データベース・オプションとして Microsoft SQL サーバを選択すると、ロギングされたデータはすべて、Microsoft SQL サーバとしてユーザが定義したホストに保存されます。

### 統計情報の収集用オプション

TrafficDirector アプリケーションは、複数のサイトでロギングされた SQL データからユーザがレポートを作成できるように、分散型データベース・アーキテクチャをサポートしています。ネットワーク（のログ・データ）をローカルに監視する複数の TrafficDirector 管理ステーションを定義し、Trend Reporter を使用してリモート SQL データベースから SQL データを収集することができます。

ほとんどのエージェント・ポーリングをローカルに実行するようにロギング方式をセットアップすることによって、中央の SQL データベースとの間の不要な発信および着信トラフィックを回避することができます。

さらに、ローカルに収集されたデータに基づいて各ローカル・サイトでレポートが生成されたり、または各リモート・サイトからのレポート情報が中央サイトで収集され、レポートがグローバルにコンパイルされるように、ユーザ環境を設定することもできます。

SQL サーバ環境を正しく設定する上で必要な主要タスクには、以下のタスクが含まれます。

- Microsoft Windows プラットフォームまたは UNIX プラットフォームのどちらかで、埋め込み SQL サーバを使用する場合
  - 履歴データを SQL データベース内に保持する期間を決定する上で必要なエージング・パラメータと利用率パラメータを指定します。これには、Configuration Rollup アプリケーションを使用します。Configuration Rollup アプリケーションについては、「Configure Rollup の起動」を参照してください。
  - (オプション) リモート・ロギング・サーバから統計情報を取得するために使用するすべての読み取り専用 SQL サーバを定義します。これには、Configure SQL Servers アプリケーションを使用します。読み取り専用 SQL サーバの設定方法については、「埋め込み SQL 読み取り専用サーバの定義」を参照してください。
  - SQL サーバを該当するエージェント定義に関連付けます。これには、Configuration Manager アプリケーションを使用します。SQL サーバをエージェントに関連付ける方法については、「SQL サーバをエージェントへ関連付ける」を参照してください。

- Windows NT サーバ環境に Microsoft SQL Server ソフトウェアを使用して、TrafficDirector のデータをロギングする場合
  - ベンダの指示に従って、SQL サーバ・データベース・ソフトウェアのインストールと設定を実行します。
  - TrafficDirector ソフトウェアに中央集中ロギング・サーバを指定します。これには、Configure SQL Servers アプリケーションを使用します。ロギング・サーバ定義に関する詳細については、「Microsoft SQL ロギング・サーバを定義する」を参照してください。
  - 履歴データを SQL データベース内に保持する期間を決定する上で必要なエージング・パラメータと利用率パラメータを指定します。これには、Configuration Rollup アプリケーションを使用します。Configuration Rollup アプリケーションについては、「Configuration Rollup の起動」を参照してください。
  - (オプション) リモート・ロギング・サーバから統計情報を取得するために使用するすべての読み取り専用 SQL サーバを定義します。これには、Configure SQL Servers アプリケーションを使用します。
  - リモート・サーバは、TrafficDirector ソフトウェアがレポート用にデータを検索することができるサーバですが、書き込みは実行されません。
  - SQL サーバを該当するエージェント定義に関連付けます。これには、Configuration Manager アプリケーションを使用します。

### TrafficDirector アプリケーションへ SQL サーバを定義する

Configure SQL Servers アプリケーションを利用することで、TrafficDirector ソフトウェアによる SQL データベースに対する、書き込みまたは読み取り動作に必要なアドレス情報とアクセス情報を定義することができます。TrafficDirector アプリケーションのロギングでは、1 つの SQL サーバだけが書き込みの対象になりますが、ユーザはこのアプリケーションを使用して、複数の SQL サーバから情報を読み込むように Trend Reporter を設定することができます。Configure SQL Servers を使用して、以下のタスクを実行します。

- Windows NT ロギング・サーバの指定 —Microsoft SQL Server オプションを実行するためのインストールに関しては、Windows NT サーバ・ベースの SQL サーバのアドレス情報とアクセス情報を TrafficDirector ソフトウェアに提供する必要があります。
- 分散レポート用に読み取り専用サーバを指定 —TrafficDirector のロギングでは、書き込みできるのは 1 つの SQL サーバ・データベースだけです。しかし、Trend Reporter は Windows プラットフォームでも UNIX プラットフォームでも、分散レポート用に複数のデータベースからデータを読み込むことができます。Configure SQL Servers を使用して、この情報を定義します。

以下の節で、さらに詳細に説明しています。

- Microsoft SQL ロギング・サーバを定義する
- 埋め込み SQL 読み取り専用サーバの定義
- SQL サーバをエージェントへ関連付ける
- SQL サーバ定義の保持

#### Microsoft SQL ロギング・サーバを定義する

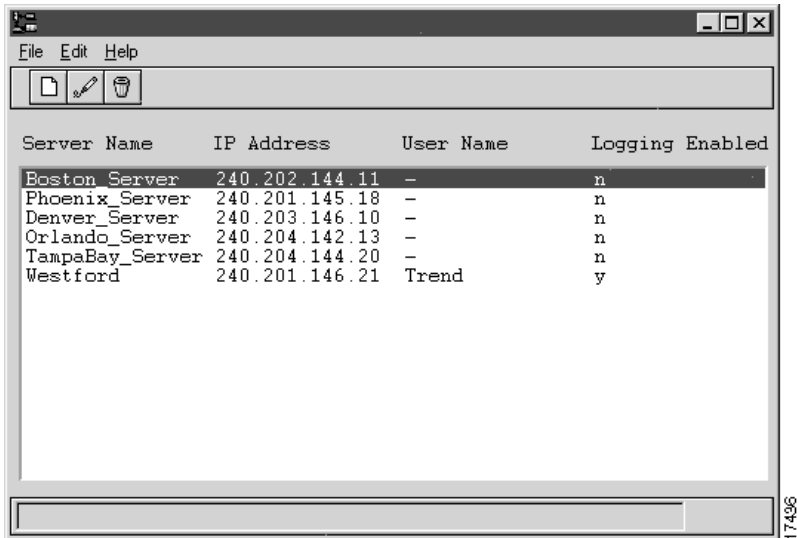
Windows NT サーバ・プラットフォーム上で TrafficDirector ソフトウェアを実行し、Microsoft SQL Server をインストールしている場合に、Configure SQL Servers アプリケーションを使用して、SQL サーバをロギング・サーバとして定義します。

ロギング・サーバを定義するには、以下の手順に従います。

**ステップ 1** TrafficDirector Admin ウィンドウの [Config Servers] アイコンをクリックします。

Configure SQL Servers ウィンドウが開きます (図 30-2)。

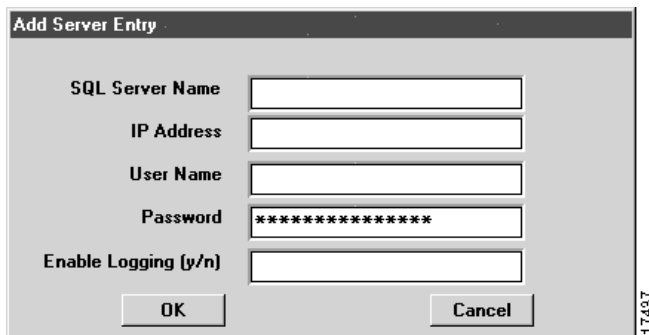
図 30-2 Microsoft SQL がインストールされた Configure SQL Servers ウィンドウ



ステップ 2 メニューから [Edit]>[New] を選択します。

Add Server Entry ウィンドウが開きます (図 30-3)。

図 30-3 Microsoft SQL がインストールされた Add Server Entry ウィンドウ



ステップ 3 Add Server Entry ウィンドウに以下の情報を入力します。

- [SQL Server Name]—SQL サーバに定義したい名前です。選択できる名前は最高で 15 文字までの英数字で、大文字と小文字が区別されます。ダッシュとアンダースコア記号も使用できます。この名前は TrafficDirector アプリケーションだけを対象として使用し、サーバに定義したネットワーク名と一致させる必要はありません。
- [IP Address]—TrafficDirector ソフトウェアにアクセスさせたい Windows NT SQL サーバの IP アドレスです。
- [User Name]—TrafficDirector ソフトウェアの SQL データベースへのアクセスに必要な SQL ユーザ名です。
- [Password]—TrafficDirector ソフトウェアの SQL データベースへのアクセスに必要な SQL パスワードです。
- [Enable Logging (y/n)]—SQL サーバをロギング・サーバとして使用するかどうかを指定します。ロギング・サーバは、TrafficDirector ソフトウェアがデータを書き込む SQL データベースです。TrafficDirector ソフトウェアは、1 つの Windows NT サーバの SQL データベースだけにロギングできます。SQL サーバをロギング・サーバとして使用したい場合には、Y を入力します。レポートのみを目的として TrafficDirector ソフトウェアにデータベースを読み込ませたい場合には、N を入力します。

ステップ 4 [OK] をクリックしてサーバ設定を受け入れ、その SQL サーバを TrafficDirector の設定に追加します。

ステップ 5 Configure SQL Servers ウィンドウを閉じます。

---

(注)UNIX プラットフォームまたは Windows プラットフォーム(埋め込み SQL 設定)用に、ロギング・サーバを作成する必要はありません。ロギング・サーバは、TrafficDirector ソフトウェアに埋め込まれた SQL コンポーネントです。

---

## 埋め込み SQL 読み取り専用サーバの定義

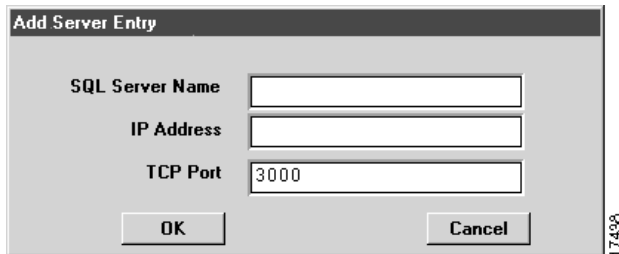
TrafficDirectorのロギングでは、レポート・データを書き込めるのは1つのSQLサーバ、つまりロギング・サーバですが、Trend Reporterの分散レポート機能によって、トレンド・レポートを生成している間に複数のSQLサーバからデータを読み込むことができます。

任意の読み取り専用SQLサーバがデータを読み込んで、そのデータからレポートを作成できるように設定するには(WindowsプラットフォームまたはUNIXプラットフォーム上において)、以下の手順に従います。

**ステップ 1** TrafficDirectorのAdminウィンドウで[Config Servers]アイコンをクリックします。

Configure SQL Servers ウィンドウが開きます(図 30-4)。

**図 30-4** Configure SQL Servers の読み取り専用ウィンドウ



The image shows a dialog box titled "Add Server Entry". It has three text input fields: "SQL Server Name", "IP Address", and "TCP Port". The "TCP Port" field contains the text "3000". At the bottom of the dialog, there are two buttons: "OK" and "Cancel". A vertical number "17438" is visible on the right side of the dialog box.

**ステップ 2** メニューから [Edit]>[New] を選択します。

Add Server Entry ウィンドウが開きます(図 30-5)。

図 30-5 Add Server Entry 読み取り専用ウィンドウ

The screenshot shows a dialog box titled "Add Server Entry". It has three text input fields: "SQL Server Name" containing "NewYork\_Server", "IP Address" containing "204.240.143.12", and "TCP Port" containing "3000". Below the fields are "OK" and "Cancel" buttons. A small vertical number "17440" is visible on the right side of the dialog box.

ステップ 3 Add Server Entry ウィンドウに以下の情報を入力します。

- [SQL Server Name]—SQL サーバの名前で、最高で 15 文字までの英数字で、大文字と小文字が区別されます。ダッシュとアンダースコア記号も使用できます。この名前は TrafficDirector アプリケーションだけを対象として使用し、サーバに定義したネットワーク名と一致させる必要はありません。
- [IP Address]—分散データベースが常駐するホストの IP アドレスです。
- [TCP Port]—TrafficDirector アプリケーションによる SQL データベースとの通信動作に使用するために指定された TCP ポートです。デフォルトはポート 300 で、.trafficdir.sh または .trafficdir.cshrc ファイルで定義されません。Config Server に入力されるポートは、データベースにログインする管理システムの .trafficdir.sh または .trafficdir.cshrc ファイルで定義される msqld TCP ポートと一致する必要があります。MSQL\_TCP\_Port の行を確認してください。

ステップ 4 [OK] をクリックしてサーバ設定を受け入れ、その SQL サーバを TrafficDirector の設定ファイルに追加します。

## SQL サーバをエージェントへ関連付ける

Trend Reporter を使用して、特定のエージェントによって収集される情報に基づいてレポートを生成します。ユーザが Configure SQL Servers で SQL サーバを定義するときに、TrafficDirector アプリケーションには TrafficDirector ソフトウェアの別のコピーがログインしている SQL データベースにアクセスするために必要な情報があります。

特定のエージェントによって収集される情報にアクセスするには、SQL サーバをエージェント名と関連付ける必要があります。これを行うには、以下の手順に従います。

- ステップ 1 エージェントをログインしているリモート管理ステーション上で、TrafficDirector ソフトウェアに定義された名前と同じ名前を使用している TrafficDirector ソフトウェアのコピーに、そのエージェントを追加します。
- ステップ 2 リモート管理ステーションがログインしている SQL サーバを、エージェント設定の一部として指定します。

各エージェントに該当するサーバを割り当てるには、以下の手順に従います。

- ステップ 1 TrafficDirector のメイン・ウィンドウで [Admin] オプション・ボタンをクリックします。
- ステップ 2 [Config Manager] アイコンをクリックします。
- ステップ 3 エージェントを 1 つ選択します。
- ステップ 4 [Edit] を選択します。
- ステップ 5 [SQL Server] リスト・ボックスをクリックします。
- ステップ 6 エージェントに対する適切なサーバを選択します。
- ステップ 7 [OK] をクリックします。

これで正しい SQL サーバ定義がエージェントに割り当てられました。

- ステップ 8 必要に応じて、それぞれのエージェントについてステップ 3 から 7 までを繰り返します。

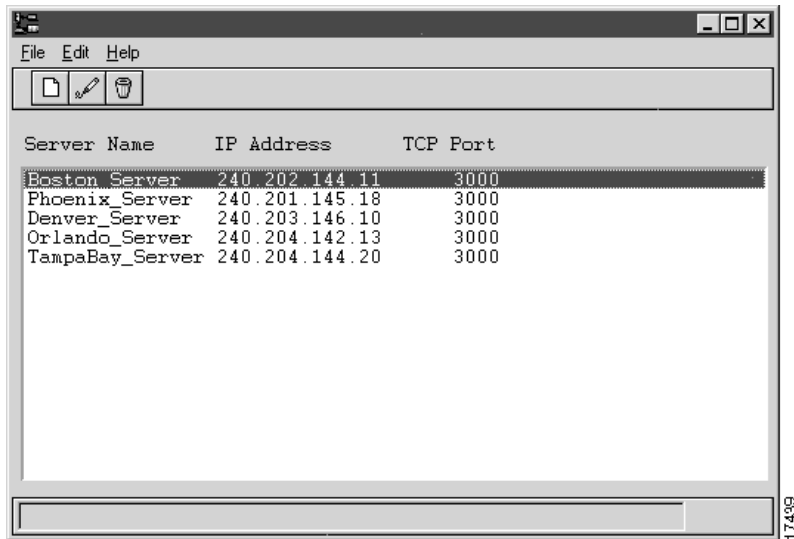
たとえば、TrafficDirector アプリケーションがニューヨークにある Windows NT プラットフォームで実行されていて、NewYork\_1 と NewYork\_2 という名前の 2 つのエージェントをポーリングしているとします。そして、ボストンにある

TrafficDirector ソフトウェアのコピーから、NewYork\_1 セグメントと NewYork\_2 セグメントに関するレポートを生成したいと仮定します。

この場合には、ニューヨークにある TrafficDirector ソフトウェアがロギングしている SQL サーバを先に定義する必要があります。たとえば、NewYork\_Server という名前の SQL サーバを作成します。

図 30-6 に、SQL サーバの設定を示します。

**図 30-6 SQL サーバの設定**



Configuration Manager を使用して、NewYork\_1 と NewYork\_2 という名前の 2 つのエージェントを、ボストンにある TrafficDirector ステーションに追加することができます。それぞれのエージェントについて、そのエージェントをロギングしている SQL サーバとして、NewYork\_Server を定義する必要があります。

エージェントの NewYork\_1 と NewYork\_2 をボストンの TrafficDirector ステーションに追加すれば、その後で Trend Reporter を使用してこれらのエージェントを選択し、各種のレポートを実行できます (図 30-7)。

図 30-7 サーバをエージェントへ関連付ける

The screenshot shows a dialog box titled "Add Agent" with the following fields and values:

- Agent Name: NewYork\_1
- IP Address: 10.20.30.22
- Interface: 1 (with a "View..." button)
- Network: Ethernet (dropdown menu)
- Description: Agent polled by TrafDir in New York
- Read Community: public
- Retries: 2
- Write Community: public
- Timeout: 5
- Startup File: startup
- Properties File: fw45prop (with a browse button "...")
- SQL Server: NewYork\_Server (with a browse button "...")

At the bottom of the dialog are three buttons: "Apply", "OK", and "Cancel".

17441

## SQL サーバ定義の保持

SQLサーバの定義を編集したい場合や、すでに使用されていない定義を削除したい場合があります。たとえばWindowsプラットフォームで、異なるログイン・サーバを指定したいことがあります。UNIXプラットフォームで、リモート管理ステーションのmsqldポートが変更されると、TCPポートの指定を変更することができます。このような場合に、以下の節で概説するようにSQLサーバの定義を編集したり削除したりすることができます。

- サーバ定義の編集
- サーバ定義の削除

### サーバ定義の編集

サーバ定義を編集するには、以下の手順に従います。

- ステップ 1 TrafficDirector の Admin ウィンドウで [Config Servers] アイコンをクリックします。  
Configure SQL Servers ウィンドウが開きます。
- ステップ 2 編集したいリモート・サーバ・エントリを選択します。
- ステップ 3 メニューから [Edit]>[Edit] を選択します。
- ステップ 4 Edit Server Entry ウィンドウが開きます。
- ステップ 5 選択した SQL サーバ・エントリのパラメータのどれかを変更します。
- ステップ 6 [OK] をクリックして、このサーバ定義を受け入れ、新たに変更した SQL サーバを TrafficDirector 設定ファイルに追加します。

## サーバ定義の削除

必要のなくなったSQLサーバ設定定義を削除するには、以下の手順に従います。

- ステップ 1 TrafficDirector の Admin ウィンドウで [Config Servers] アイコンをクリックします。
- ステップ 2 削除したい SQL サーバ・エントリを選択します。
- ステップ 3 メニューから [Edit]>[Delete] を選択します。
- ステップ 4 TrafficDirector ソフトウェアによって、その SQL サーバ設定が削除され、Configure SQL Servers のメイン・ウィンドウから消去されます。

## ロギングの概要

TrafficDirector アプリケーションは、ネットワーク・セグメント上のエージェント (SwitchProbe 装置とネットワーク分析モジュール) から情報を検索します。このデータをリアルタイム監視アプリケーションでの表示に使用したり、またはこのデータを定期的にSQLデータベースにロギングし、後で抽出してカスタマイズされたレポートを作成することもできます。

ロギングとは、エージェントからデータを検索して、これをデータベースに保存する動作です。

- エージェントは情報を引き出すためにポーリングされます。
- エージェントから検索されたデータは、SQL データベースにロギングされます。

データは、ポーリングされる装置に関連付けられたプロパティ・ファイルで有効にされているロギング・パラメータに基づいてロギングされます。プロパティ・ファイルの詳細については、[第 6 章の「プロパティ・ファイルの使用方法」](#)を参照してください。

TrafficDirector ソフトウェアを 1 つの SQL データベースに対して設定する必要があります。SQL データベースにロギングするための、SQL サーバの設定に関する説明については、「SQL データベースのセットアップ」を参照してください。

- Trend Reporter を使用してレポートを生成することにより、データの検索、分析および表示ができます。

データを収集するように装置が設定されていない場合は、データをロギングできません。ロギングされていない場合は、レポートも実行できません。

以下の節では、デーモンについてその概要を説明しています。

- デーモンの理解

## デーモンの理解

デーモンはバックグラウンドで実行されるプロセスであり、プロセス・グループと端末から切り離されています。TrafficDirector ソフトウェアでは特定のデーモンを使用して、他のデーモンの制御、トラップ制御、ポーリング（エージェントからのネットワーク・データの取り込み）、データのロギング（SQL データベースへのデータの保存）、データベース・レコードのバージが実行されます。どのような方法で、いつデーモンを使用してその役割を実行するかを定義する設定ファイルに関連して、デーモンが動作します。

表 30-1 に、SQL データベースと TrafficDirector アプリケーションで動作するデーモンに関する説明を示します。

**表 30-1 ロギングを制御するデーモン**

デーモン名	実行する機能
チェック・デーモン (dbchkd)	このデーモンは TrafficDirector ソフトウェアによって起動され、以下のデーモンを起動します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>データベース・サーバ・デーモン (msqld)</li> <li>トラップ・デーモン (dvtrapd)</li> <li>スナップショット・デーモン (dbsnapd)</li> <li>IP PING スナップショットとプロキシ SNMP デーモン (dbsnpres)</li> <li>抽出デーモン (dbextrad<sup>1</sup>)</li> <li>エージング・デーモン (dbrolld)</li> </ul>
スナップショット・デーモン (dbsnapd)	dbchkd デーモンによって起動され、ネットワーク・エージェントをポーリングして、データをスナップショット、詳細および要約のバイナリ・ファイルにロギングします。
エージング・デーモン (dbrolld)	すべてのデータベース・テーブルを（24 時間ごとに）午前 2:00 にエージングします。
SQL サーバ・デーモン (msqld)	データ・レコードをバイナリ・ファイルから埋め込み SQL データベースに移行します。さらに、レポートینگ・クエリも処理します。

**表 30-1 ロギングを制御するデーモン（続き）**

デーモン名	実行する機能
IP PING デーモンと プロキシ SNMP (dbsnpres)	ネットワーク・エージェントをポーリングし、情報をスナップショット、詳細および要約の IP PING バイナリ・ファイルにロギングします。
抽出デーモン (dbextrad)	データ・レコードをバイナリ・ファイルから Microsoft SQL データベースに移行します（Windows NT プラットフォームのみ）。
オートレポート・ デーモン (autorptd)	autorpt.cfg ファイルで設定されたすべてのレポートを順次実行します。このデーモンは毎日午前 3:00 に起動します。
トラップ・デーモン (dvtrapd)	SNMP トラップ・メッセージを受信して、ロギングします。すべてのデーモンから重要なフェータル・メッセージとアラート・メッセージを受信およびロギングします。

1 Microsoft NT SQL のみ

これらの各デーモンに関する詳細については、[第33章](#)の「レポート・リソース情報の検討」を参照してください。

## ロギングの有効化と無効化

ロギングを無効にすると、データがSQLデータベースにロギングされないため、レポートをまったく生成することができません。どのようなプラットフォームを使用しているか、またはプロパティ・ファイルでどのようなロギングを有効にしていたかに関わらず、レポートの生成は不可能です。

ロギングを無効にするには4つの方法があり、これを表30-2のリストに示します。

**表 30-2 ロギング・ユーティリティの有効 / 無効**

ロギングのオン / オフ	UNIX	Windows NT
インストール・スクリプト	サポート	サポート
ロギングの <code>-on -off</code> コマンド	サポート	サポート
Exit— デーモンのシャットダウン	サポート <sup>1</sup>	サポート
シャットダウン・ユーティリティ — <code>dbshutdown</code>	サポート	利用不可 <sup>2</sup>

1 UNIX 上では、デーモンをすべてシャットダウンするプロンプトでユーザが [Yes] を選択しても、`msqld` デーモンと `dvtrapd` デーモンは実行を継続します。

2 Windows NT 上では、すべての TrafficDirector デーモンはカーネル・モード・アクセスの NT SCM(Service Control Manager) のもとで実行されているので、コマンド・コンソールから `dbshutdown -all` を実行しようとしても動作しません。

(注) RMON Manager Service を無効にしたり停止すると、すべてのロギング機能とレポート機能は自動的に無効になります。この詳細については、[付録 B の「TrafficDirector 環境のメンテナンス」](#)を参照してください。

以下の節では、ロギングの有効化と無効化について詳細に説明しています。

- インストール時にロギングを有効化および無効化する
- インストール後にロギングを有効化および無効化する

## インストール時にロギングを有効化および無効化する

TrafficDirector のインストール・スクリプトは、TrafficDirector のデータ・ロギングを有効(デフォルト)にするか無効にするかを、ユーザに問い合わせるプロンプト・メッセージを表示します。

ロギングを有効にするには、以下の手順に従います。

ステップ 1 [Yes] オプション・ボタンをクリックします。

ステップ 2 [Next] を押します。

以上の操作で、TrafficDirector のロギング・デーモンが有効になります。この操作は、ロギングが有効にされているプロパティ・ファイルで設定されているすべてのエージェントに影響します。これらのエージェントに関する情報は、設定された SQL サーバにロギングされます。

ロギングを無効にするには、以下の手順に従います。

ステップ 1 [No] オプション・ボタンをクリックします。

ステップ 2 [Next] を押します。

以上の操作で、TrafficDirector のロギング・デーモンが無効になります。この操作は、ロギングが有効にされているプロパティ・ファイルで設定されているすべてのエージェントに影響します。

---

## インストール後にロギングを有効化および無効化する

インストール後に、ロギングはデフォルトでオンになります。

- ロギングの無効化 — コマンド・プロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
$NSHOME/bin/logging -off
```

logging.on ファイルが、\$NSHOME/usr ディレクトリに現れます。

- ロギングの有効化 — コマンド・プロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
$NSHOME/bin/logging -on
```

logging.off ファイルが、\$NSHOME/usr ディレクトリに現れます。

---

(注)ロギングがオンで、RMON Manager Service が無効または停止している場合には、logging.on ファイルは logging.off に変更されません。RMON Manager Service の詳細については、[付録 B](#) の「TrafficDirector 環境のメンテナンス」を参照してください。

---

## TrafficDirector アプリケーションの終了時にデーモンをシャットダウンする

TrafficDirector アプリケーションを終了させるときには、確認ボックスが表示され、すべてのデーモンのシャットダウンについて [Yes] か [No] を選択するように要求するプロンプト・メッセージが表示されます。

```
Do you want to shutdown all deamons?
```

UNIX 上では、[Yes] を選択しても msqld デーモンと dvtrapd デーモンは実行を継続します。

- [Yes] を選択すると、すべてのデーモンはシャットダウンします。Windows NT では、この操作によってロギングとレポートが無効になります。UNIX では、msqld デーモンと dvtrapd デーモンは実行を継続し、ロギング機能とレポート機能は有効のままです。
- [No] を選択すると、すべてのデーモンは実行を継続し、ロギング機能とレポート機能は有効のままです。

以下の節で、デーモンのシャットダウンについて詳細に説明しています。

- dbshutdn シャットダウン・ユーティリティの使用

### dbshutdn シャットダウン・ユーティリティの使用

dbshutdn コマンド行ユーティリティを使用して、現在実行中のすべてのロギング・デーモン (dbsnapds、msqld または dbextrad、dbsnpres) を停止します。

---

(注) dvtrapd デーモンはこのユーティリティでは停止しません。  
dvtrapd を停止するには、**dbshutdown - all** コマンドを使用する必要があります。

---

シャットダウンを完了させるために、dbchkd によって各種のデーモンが実行されたときに作成された PID (プロセス ID) のリストをユーティリティはすべてチェックして、すべてのデーモンをシャットダウンします。

表30-3に、プロセスIDを示します。

**表 30-3 プロセス ID**

プロセス ID ファイル	以下のプロセス ID を格納する
agent.pid	dbsnapds ( *.alg ファイルのすべてのデーモン )
switch.pid	dbsnapds ( *.slg ファイルのすべてのデーモン )
fragent.pid	dbsnapds ( *.flg ファイルのすべてのデーモン )
msqld.pid	msqld
dbextrad.pid	dbextrad
dbsnpres.pid	dbsnpres

(注) Windows NT 上では、`dbshutdown - a11` コマンドは RMON Manager Service によって使用され、これによってすべてのデーモンを停止させます (msqld と dvtrapd を含む)。

## レポート用データのロギングとエージング

長期間に大量のデータ・サンプルを生成すると、より多くのディスク空間が消費されます。ディスク空間を自動的に維持する1つの方法は、Config Rollup アプリケーションを使用してデータ・エージング・パラメータをユーザのニーズに合うように設定することです。

Config Rollup を使用して、各種タイプのレポート・データがロールアップとエージングのデーモン (dbrolld) によって自動的に削除されるまでに、SQL レポート・データベースにどの程度長く保存されるか (日数) を定義します。

以下の節では、レポートおよびデータベース管理のニーズに適合するように、エージング・パラメータを編集する方法について説明しています。

- データベースのエージングの理解
- Configure Rollup の起動
- データベース・エージング・パラメータのカスタマイズ設定

### データベースのエージングの理解

ユーザが定義するエージング・パラメータによって、プロトコル、セグメント、ホスト、カンパセーション、IP-PING、プロキシ、SNMP、ALL NL、ALL AL、ART および ART サーバの情報が、詳細および要約データベース・テーブルに保持される日数が決定されます。最小利用率パーセント・パラメータを指定することによって、情報がホストおよびカンパセーション・データベース・テーブルにロギングされるためには、ホストまたはカンパセーションの使用率がどのレベルに到達するか、またはどのレベルを超える必要があるかを定義します。最小利用率パーセント・パラメータを使用して、どの程度の量のホストおよびカンパセーション・トラフィックが SQL データベースにロギングされるかを制御します。

プロトコル、セグメント、ホスト、カンパセーション、IP-Ping、プロキシ、SNMP、ALL NL、ALL AL、ART、ART サーバそれぞれの統計情報タイプについて、これらが dbrolld デーモンによって自動的に削除される前に、その詳細と要約のデータを保持したい日数を指定できます。各データベース・テーブルに格納される統計データに関する詳細については、[第33章の「レポート・リソース情報の検討」](#)を参照してください。

たとえば、毎日または毎月の要約データを保持しておいて、そのデータを長期トレンド監視に使用したい場合があります。このような場合には、要約のエージングを365日に指定します。詳細データを数日間保持して、週ごとに削除したい場合もあります。このような場合には、詳細のエージングを7日に指定します。

## Configure Rollup の起動

Configure Rollup を起動するには、以下の手順に従います。

**ステップ 1** TrafficDirector の Admin ウィンドウで [Configure Rollup] アイコンをクリックします。

Configure Rollup ウィンドウが開きます (図 30-8)。

すべてのフィールドは、TrafficDirector のデフォルト値に設定されています。

図 30-8 Configure Rollup ウィンドウ

エージングの設定

- ・ 詳細
- ・ デイリー

ベースライン・テーブルの設定

フィルタの範囲の設定

ホストとカンパセーションの最小利用率の設定

時間範囲のベースラインの設定

The screenshot shows the 'Configure Rollup' window with the following sections:

- Aging (Days):** A table with columns 'Tables' and 'Aging (Days)'. Rows include Protocol, Logon, Host, Conversation, IP Ping, Proxy SNMP, ALL HL, ALL AL, AHT, and AHT Server.
- Daily:** A table with columns 'Tables' and 'Daily'. Rows include SQL, DBA, and several others.
- Baseline:** A table with columns 'Baseline A' and 'Baseline B'. Each row has an 'Enable' checkbox.
- Range Filter:** Fields for Start, End, and Host Tables.
- Baseline Range:** Fields for Start and End, with sub-fields for Month, day, and year.

以下の節では、Configure Rollup について詳細に説明しています。

- Configure Rollup ウィンドウの理解
- 日単位の開始時刻と終了時刻の設定
- ベースライン・レポートの使用

## Configure Rollup ウィンドウの理解

Config Rollup の手順で操作に入る前に、Configure Rollup ウィンドウのデータ・フィールドに関する説明として表30-4を参照してください。

**表 30-4 Config Rollup のフィールド**

フィールド名	含まれる情報のタイプ
Aging (単位: 日)	<p>エージング・パラメータの定義によって、プロトコル、セグメント、ホスト、カンパセーション、IP-PING、プロキシ、SNMP、ALL NL、ALL AL、ART、ART サーバの情報が、詳細と要約のデータベース・テーブルに保持される日数を決定します。</p> <p>プロトコル、セグメント、ホスト、カンパセーション、IP-PING、プロキシ、SNMP、ALL NL、ALL AL、ART、ART サーバそれぞれの統計情報タイプについて、詳細と要約のデータを保持したい日数を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• Detail Aging—情報が古くなったために、詳細テーブルから削除することがエージング・デーモンによって決定されるまで、情報をエージングする日数を表示します。詳細エージングは1日より長くする必要があります。詳細テーブルのプロトコルとセグメントの統計情報エージング日数のデフォルト値は31日です。ホスト、カンパセーション、IP-PING、プロキシ、SNMP、ALL NL、ALL AL、ART および ART サーバについては、7日です。</li><li>• Daily Aging—情報が古くなったために、デイリー・テーブルから削除することがエージング・デーモンによって決定されるまで、情報をエージングする日数を表示します。デイリー・エージングは1日より長くする必要があります。要約(デイリー)テーブルのプロトコルとセグメントの統計情報エージング日数のデフォルト値は366日です。ホスト、カンパセーション、IP-PING、プロキシ、SNMP、ALL NL、ALL AL、ART および ART サーバについては、31日です。</li></ul>

表 30-4 Config Rollup のフィールド ( 続き )

フィールド名	含まれる情報のタイプ
Host and Conversation Table ( 最小利用率 )	<p>最小利用率パーセント・パラメータを指定することによって、情報がホストおよびカンパセーション・データベース・テーブルにロギングされるために、ホストまたはカンパセーションの使用率がどのレベルに到達するか、またはどのレベルを超える必要があるかを定義します。最小利用率パーセント・パラメータを使用して、どの程度の量のホストおよびカンパセーション・トラフィックが SQL データベースにロギングされるかを制御します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Host Threshold— ホストがホストの詳細テーブルに含まれるまでに、ホスト（着信と発信の利用率の組み合わせ）が満足する必要がある、最小利用率パーセント値を設定します。スナップショット・デーモンは、ホスト・セグメントの利用率パーセント値をこの数値と比較し、利用率パーセント値がこの値と一致するか、またはこの値を超える場合だけに限り、データをホスト・ピン詳細バイナリ・ファイルにロギングします。</li> <li>• Conversation Threshold— カンパセーションがカンパセーション詳細テーブルに含まれるまでに、カンパセーションが満足する必要がある送信元 / 送信先間の最小利用率パーセント値を設定します。これは、スナップショット・デーモンがカンパセーションの送信元 / 送信先間の利用率パーセント値をこの数値と比較し、利用率パーセント値がこの値と一致するか、またはこの値を超える場合だけに限り、データをカンパセーション・ピン詳細バイナリ・ファイルにロギングすることを意味します。</li> </ul>

表 30-4 Config Rollup のフィールド ( 続き )

フィールド名	含まれる情報のタイプ
Range Filter	<p>要約データが SQL デイリー ( 要約 ) ・ テーブルにロギングされる時間の長さを決定します。</p> <p>この時間パラメータのデフォルト値は 00:00-24:00、つまり 24 時間のすべての時間帯です。たとえば、範囲を 08:00 - 18:00 に設定した場合には、SQL デイリー ( 要約 ) ・ テーブルには、標準 24 時間ではなく 10 時間分の要約データだけが格納されます。</p> <p>Config Rollup アプリケーションで設定される時間範囲値は、Trend Reporter GUI ( グラフィカル ・ ユーザ ・ インターフェイス ) の初期化設定に使用されます。</p> <p>各日の特定の時間帯 ( たとえば、ピークの業務時間 ) について、複数の日数をカバーするレポートを生成することができます。それぞれのレポートまたはオート ・ レポートを固有の時間帯パラメータ設定で個別に設定することができます。レポートについて特定の時間帯を設定する方法に関する詳細は、<a href="#">第 31 章の「レポートの設定と作成」</a>を参照してください。</p> <p>\$NSHOME/usr/dbupdate.cfg ファイルで保持されている時間帯パラメータを使用して、SQL デイリー ( 要約 ) ・ テーブルに保持されるデータの期間 ( 時間帯 ) にこのパラメータを適用することができます。</p>

## 日単位の開始時刻と終了時刻の設定

レポートの日単位の開始時刻と終了時刻を設定するには、以下の手順に従います。

- ステップ 1 TrafficDirector のメイン ・ ウィンドウで [Trend Reporter] アイコンをクリックします。
- ステップ 2 日単位の開始時刻と終了時刻を設定します。

## ベースライン・レポートの使用

ベースライン・レポートでは、1つのプロトコル利用率レポートまたはセグメント履歴/要約レポートで類似した2つの時間範囲が比較されます。ホスト/カンバセーション・テーブル上でベースライン・レポートを実行することはできません。

ベースライン・レポートには、エージェントからすでに収集されたデータが表示されます。このデータはユーザの選択に応じて、Trend Reporter がレポートを作成できる SQL データベースに保存されます。

ベースライン・レポートを使用して、1つのレポート内の2つの類似時間範囲を比較します。ベースライン・レポートでは、ベースライン・データが現在の（新規）データに隣接して表示されます。

ベースライン・レポートを使用して、その日の特定の時間におけるネットワーク上のアクティビティ・レベルを追跡したり、ネットワークの拡張計画および利用率ポリシーを決定します。

### ベースライン A とベースライン B

各ベースライン・テーブル（プロトコル、セグメント、ホストなど）は、ベースラインの時間範囲に関与するように設定することができます（有効/無効）。ベースライン A とベースライン B の時間範囲データは、ベースライン・データがレポート時に利用できるように維持されます（ページに対して保護されています）。

Trend Reporter は、これらのテーブルに保存されているデータを使用してベースライン・レポートを作成します。

チェック・マークの付いたボックスは、そのテーブルの情報が定義されたベースライン範囲に基づいてページから保護されていることを示します（図 30-9）。

図 30-9 ベースライン A とベースライン B— および対応したテーブル

Tables	Aging(Unit: Days)		Baseline	
	Detail	Daily	Baseline A	Baseline B
Protocol	<input type="text" value="31"/>	<input type="text" value="366"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
Segment	<input type="text" value="31"/>	<input type="text" value="366"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
Host	<input type="text" value="7"/>	<input type="text" value="31"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
Conversation	<input type="text" value="7"/>	<input type="text" value="31"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
IP-Ping	<input type="text" value="7"/>	<input type="text" value="31"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
Proxy SNMP	<input type="text" value="7"/>	<input type="text" value="31"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
ALL NL	<input type="text" value="7"/>	<input type="text" value="31"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
ALL AL	<input type="text" value="7"/>	<input type="text" value="31"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
ART	<input type="text" value="7"/>	<input type="text" value="31"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable
ART Server	<input type="text" value="7"/>	<input type="text" value="31"/>	<input checked="" type="checkbox"/> Enable	<input checked="" type="checkbox"/> Enable

17443

### ベースラインの範囲

指定された時間範囲内で情報がパージされないようにデータベースを保護するように、2つのベースライン時間範囲を設定することができます。ベースライン範囲でユーザが指定する時間範囲によって、詳細およびデイリー・エージング（単位：日）カテゴリで定義されるエージング・パラメータが無効になります。時間範囲は、Config Rollup ウィンドウで有効にされている個別のベースライン・テーブルの値だけに適用されます。特定のテーブルのベースライン値が有効でなければ、その値はベースラインには含まれません。

2つのベースラインを設定することができます。ベースライン範囲を Config Rollup に追加しなければ、各テーブルそれぞれのベースライン値がデフォルトで有効であっても、個別のレポートを生成するときに、オプションとしてのベースラインはまったく表示されません。

ベースライン範囲領域を使用して（図 30-10）ベースライン A とベースライン B のデータの開始時刻と終了時刻を設定することができます。

図 30-10 [Baseline Range] ボックス

	Start			End		
	Month	dd	yyyy	Month	dd	yyyy
Baseline A	None			None		
Baseline B	None			None		

17444

## データベース・エージング・パラメータのカスタマイズ設定

各統計情報タイプについてそれぞれデータベースのエージング・パラメータをカスタマイズ設定するには、以下の手順に従います。

- ステップ 1** TrafficDirector のメインウィンドウで [Admin] オプション・ボタンをクリックします。
- ステップ 2** [Config Rollup] アイコンをクリックします。
- ステップ 3** 各データベース・テーブルに詳細エージング日数を入力します。
- 各テーブルに 1 日またはそれ以上の日数を指定することができます。
- ステップ 4** 各データベース・テーブルに要約（デイリー）エージング日数を入力します。
- 各テーブルに 1 日またはそれ以上の日数を指定できます。
- ステップ 5** ホストまたはカンパセーションのデータをロギングするために、到達または超える必要がある最小利用率値を入力します。
- ステップ 6** ベースライン・テーブル（プロトコル、セグメント、ホストなど）のベースライン時間範囲参加を有効にするか、または無効にします。
- デフォルトでは、すべてのテーブルが有効です。
- ステップ 7** ベースライン A とベースライン B の時間範囲を設定します。
- この時間内のデータは、レポート時にベースライン・データが利用可能になるように保持されます（ページに対して保護されています）。

**ステップ 8** 指定したパラメータを適用するときには **[OK]** をクリックし、操作を取り消してフィールドをすべてリセットするときには **[Cancel]** をクリックします。